

原発いらない栃木の会 news

原発から再生可能エネルギーの推進へ
エネルギー政策の転換を求める陳情活動について



宇都宮市那須町など 13 自治体が採択

事務局長 大木 一俊

1 陳情活動をすることになった経緯

原発いらない栃木の会(以下「本会」といいます)が 2011年7月23日に発足して間もない8月28日の役員会において、島田代表から、国のエネルギー政策を脱原発に向けたものに転換するには、地方からの声を国に上げていくことが重要で、そのためには地方議会にそのような決議をするよう陳情をすべきであるとの提案がなされました。折しも、福島第一原発事故を受けて、菅直人首相が、「2020年までに9基、2030年までに少なくとも14基以上の原発の増設を行う」とした2010年6月策定のエネルギー基本計画の見直しを指示したところでしたので、この陳情活動は、エネルギー基本計画中のこの部分を改めさせ、脱原

発の方向を盛り込ませようとするをも意味していました。当然のことながら、役員会の全員一致で可決されました。

そして、10月2日の役員会で、陳情の趣旨を、(1)再生可能エネルギーの推進をエネルギー政策の中心に据えること、(2)原子力発電の比率を段階的に縮小し、最終的にはゼロにすること、(3)エネルギー政策における国民参加の実現の3項目とすることを決め、11月12日の役員会で、陳情書の内容を決定し、那須塩原市と益子町については12月議会での採択、その他の議会については3月議会での採択を目指し、できるだけ多くの議会に陳情を提出することにしました。

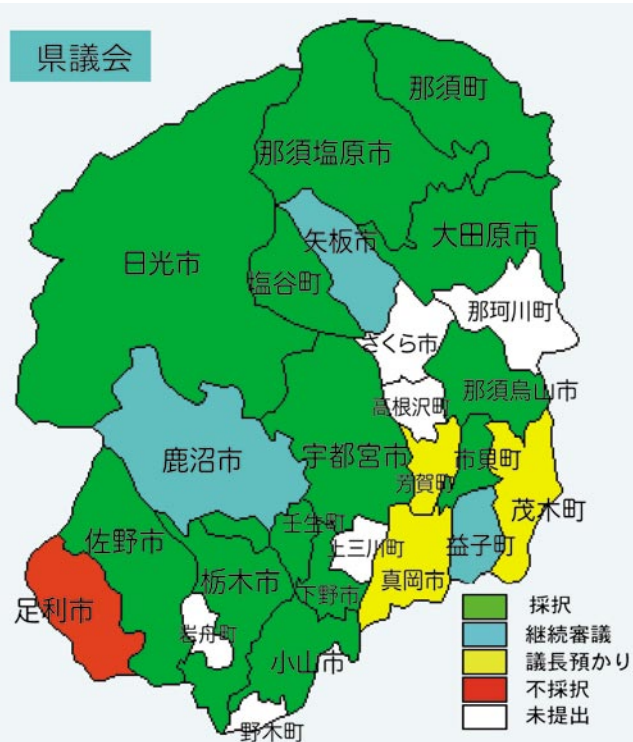
2 陳情活動の実際

11月16日には、益子町議会に対し、本会と5団体の名前で陳情書を提出し、同月18日には、那須塩原市議会に対し、本会単独で陳情書の提出をしました。しかし、益子町については議長預かりに、那須塩原市については継続審議となってしまうことになりました。これは、議員の不勉強もさることながら、そのことを前提にして、陳情を審議する各議員に対する働きかけを行わなかったという本会側の運動の甘さもあったことを反省し、12月11日の役員会では、地方自治体ごとに担当者を決めて、少なくとも各会派に対する要請及び陳情内容の説明を実施することを決めました。

そして、それ以降、担当者を中心に、適宜、各議会の会派代表者等と接触して、陳情の内容の説明と、本会事務局が用意した「原発のコスト」(岩波新書)からの説明資料をもとに、実は原子力発電のコストは高いこと、原発がなくとも電力需給には影響がないこと等の説明を行いました。

その結果は後記3のとおりです。傾向としては、議員に対する働きかけを精力的に行った自治体、あるいは問題

栃木県内各議会の状況



をよく理解してくれている議員がいる議会では、採択になっているのに対し、そうでない議会は継続審議あるいは議長預かりとなってしまう傾向があります。

3 現在までの成果

これまで、陳情又は請願を掲出した 22 議会のうち 13 議会が既に採択となっており、その余の 9 議会のうち、足利市を除く 8 議会では 6 月議会で採択される可能性があり、公開の陳情活動はまずまずの成果であったと評価できます。

(1) 採択された自治体

那須塩原市、大田原市、日光市、宇都宮市、那須烏山市、栃木市、下野市、小山市、佐野市、那須町、塩谷町、壬生町、市貝町

(2) 継続審議となった自治体

栃木県、矢板市、鹿沼市、益子町、結城市(但し請願)

(3) 議長預かりとなった自治体

真岡市、茂木町、芳賀町

(4) その他

足利市

(5) 未提出の自治体

さくら市、那珂川町、高根沢町、上三川町、岩舟町、野木町

4 今後の運動について

私たちの最終目的は、原発をなくすことであり、陳情活動の当面の目的は、8月策定予定のエネルギー基本計画に脱原発の楔を打ち込むことです。そのためには、足利市を含めて、未採択の議会に対する働きかけを継続するとともに、未提出の議会に対しても、提出をしたいと考えています。

また、目的実現のためには、日本中の地方自治体からこのような意見が上がって来ることが極めて有効です。そのためには、本会のこの運動を他の都道府県の運動体へも波及させる必要があります。この点、是非、各会員におかれましては、県外の知り合いに本会のこの活動を知らせ、同様の行動を取るよう働きかけてください。

鹿沼から陳情活動の報告

杉山 哲之

1 陳情活動について

2月15日、原発いらない栃木の会が作成した陳情書を、大木弁護士と共に、鹿沼市議会議長宛を議会事務局に提出した。

提出した陳情書を、弁護士が資料を基に具体的に内容を説明し、対応した事務局長も一定の理解を示した。その後、各会派を廻り、10分前後、同内容の説明をし、議会での陳情書の賛同を求めた。

どの会派も、電力が確保されれば、概ね、時間をかけてエネルギー転換の必要性が認識された。また、この陳情書は、県、各市にも同内容の陳情をしていることも説明。なお、当日は、議員全員協議会開催のため、一部説明に間に合わない会派もあったが、陳情書のコピーと資料を置いて、鹿沼市議会への対応を終了した。

2 原発事故の被害状況とこれからの活動

昨年、3月11日の原発事故後、鹿沼市にも飯館村から多くの方がフォレストアリーナに避難してきた。

私は7月2-3日、1泊で社民党の国会、県会、市会、その他の地方議員と、福島駅に集合、バス2台で飯館村

の中央を通り、南相馬の危険区域20km地点まで行き、海岸沿いに廻り、津波の被害を目の当たりに見てきた。言葉が出ないほど衝撃を受けた。飯館村では、役場の職員がバスに乗り込んで案内をしてくれ、車内の放射線約3.5マイクロシーベルト、誰もいない牧場で全員下車、牧草の上は約6.4前後、側溝の中は約9.1だった。車窓から見た道路沿いの畑は荒れ果て、田んぼの跡は少し稲株の跡が荒れた中に残っていた。放射能は目に見えない。におわない。多くの人は驚いていた。飯館村は20km圏外だ。案内した職員が言った。私たちは原発の補助は一つも受けていないが、今回の事故で多大なリスクだけを受けた。その他にも、コソ泥に何億の被害を受けていると報告があった。これも原発による被害だ、と。

最近鹿沼市も、国の除染対象地域に指定され、どう除染するのか見守りたい。これからも汚染された空、海、土、そして精神的苦痛を除染に向けて、頑張りたいと思います。



福田栃木県知事と「子どもたちの内部被曝を防ぐ緊急要望」会見をして

明良 佐藤

2月10日に、福田栃木県知事と私たちの会と連名署名頂いた栃木県の8団体の代表の方ともに直に会って、要望を伝え、お話をした。3.11以降、子どもたちの内部被曝を防ぐために、直に福田知事に会って、その思い伝えたのは、県内では初めてだと思う。

低線量被曝地帯となった栃木県の放射能対策を行うトップは、知事であり、そのリーダーシップ如何が、今後のカギを握るのは、間違いない。政府の腰が引けている現状では、地元対策としては、県知事の率先した姿勢を望むしかない。



会見内容は、原発いらない栃木の会のホームページに掲載しているので、ご覧いただきたいが、率直に言って「会って、思いを直に伝えられた。その意味でよかった」と思っている。知事の対応はまことに紳士的であって、誠実さが感じられた。

私たちが一番気にしている「内部被曝を防ぐための食品計測器の大量の導入による子どもたちの口に入る前のチェックの必要性」だが、「機材の問題は、新年度予算で、十分とはいえないが、各学校などの希望によって、食べる前の給食の検査が実施できるように、7つの教育振興事務所があるが、その内の5箇所にとりあえず検査機器を配置したい、4月になれば速やかに発注したい」との回答があり、さらに、那須町は昨年末から町でも検査をしているが、同様に、大田原市、佐野市、矢板市、さくら市に、順次配備をして検査体制を整えていきたいと思っている」と述べている。また、食品計測器の大量導入では、国への予算獲得が必要になるが、この点については「今日の要望、明日の意見交換（「有識者会議」の意見交換会）を踏まえて、その都度国にたいしては要望していきたい。復興庁が今日から、栃木には事務所ができませんでしたが、昨日の国会のやりとりでは職員の方が大勢被災地を巡るということになっているそうですから、当然、栃木にも来てくれるでしょうから、そういう際にも当然話しをしていきたいし、また文書で直接霞ヶ関にも出していきたい」と積極的な回答をもらっている。

現在、市民の放射線問題の活動では、「有識者会議」への要望と意見も活発に行われているので、今回の知事との要望と会見は、市民の願いとしては、その両輪として機能したと思う。というのは、知事はこう述べている。

「有識者会議の皆さん方の提言が、2ヶ月間の調査(3700名の保育園・幼稚園の方々から中学生まで、2ヶ月間のガラス線量バッジによる外部被曝の測定と陰膳方式(一食余計につくる)で、学校給食についても検査をして内部被曝の推計をする)が入ったので、年度末で考えていたが、新年度にずれ込むことになるが、それを受けて、その測定結果のデータも見て、その上で提言がなされるはずですので、皆さん方の意見もどういう風に施策に反映すべきかという意見もついてくるはずですから、それらも含めて、新年度については、予算発表は昨日いたしましたけれども、しかし今後起こりうる、可能性があるものについて、対応すべきものについては、これは柔軟に補正予算でも組みながら、議会の了承を得て、新たな対応をしていかなければならないと思っているので、そういう点では、今日のこの要望、明日の意見交換、さらにはデータの解析などを経て、新年度4月以降、速やかに取り組むべき事案が出てくれば対応していきたいと思っているので、今日のこの『緊急要望』についても先生方にも見てもらって、その上でできるものは対応していきたいと思っている」と。

したがって、今後、どのような動きが出てくるか、県行政のトップリーダーとしてどのような手腕を発揮するか、私たちとしては、県内全域が低線量被曝地帯として、内部被曝を防ぐことが今後の子どものために、むろん大人にとっても、いかに大事かを十分に知事に、その危機意識を直に伝え得たと思っているので、注意深く見守っていきたいと思っている。



2.11 「さようなら原発 1000 万人アクション」代々木公園に 12000 人

平和センター 福田宏至

2月11日、東京・渋谷代々木公園イベント広場で、「さようなら原発 1000 万人アクション・全国一斉行動」が開かれ、12000 人の参加者が会場周辺を埋め尽くした。

昨年3月11日の東日本大震災から11ヵ月。集会開会の午後1時30分には、ステージが見えないほどののぼり旗が立ち、歩道橋の上まで参加者は膨れ上がった。

1000 万人アクションの呼びかけ人の一人・大江健三郎さんが最初に登壇。昨年9月に開かれた明治公園での「6万人集会」を振り返り、そこで語られた福島県の農漁民の苦悩を宮沢賢治の詩に重ね、「静かに怒りを燃やす姿を、私たちの声として生かしていこう」と。そして「原発を一掃することは、もっと大きく根本的な人間の倫理。原発を止めるという決意を、子どもたちにはっきり言うことが希望の明かりである」と話した。

作家の澤地久枝さんは「5月には日本のすべての原発が止まる。私たちのアピールの力でこの日を迎える」。「政府は、自分で引き起こした事故すら収束できないくせに、外国に原発を売ろうとしているが、世界の人々は嫌がっている。これこそ国籍を超えた市民の意思だと訴えた。

福島県平和フォーラムの永山信義さんは、「県はようやく廃炉の態度を明らかにしたが、推進派の巻き返しの動きには細心の注意を払うべきだ」。そして「死の町と表現して辞任に追い込まれた大臣がいたが、そんな現実を作った者の責任はどうなる。絆、絆と叫ばれているが、その絆をぶち壊したのはいったい誰だ」と厳しく糾弾。「美しい福島を返せ。私たちのささやかな日常を返せ」と声を荒げた。

東京で避難生活を送る「放射能から避難したママネット@東京」の増子理香さんは事故後、母親たちのネットワーク団体で活動。「福島県民は一艘の小舟のよう。どこに流されるかわからない」。転校を繰り返す子どもたちに思いを寄

せ、「これ以上悲しい思いをさせないでほしい。同じ過ちを繰り返さないでほしい」と言葉を詰まらせた。

福島で有機農業を続ける菅野正寿さんは、生産者の立場からマスコミ報道に怒りを露わにした。原発事故後農業は大きな打撃を受けたが、福島県農産物への放射性物質の移行はないという。しかしメディアは自分たちをまるで加害者のように描いている。それでも菅野さんは、「福島の再生を通じて、持続可能な社会の実現をめざしていく」



と力を込めた。

俳優の山本太郎さんは、「本当に国を愛している人がここに集まっている」。「いま原発は3基しか動いていない。でも電力には余裕があるんです。ウソをつかれています」。もっと声を出して怒りませんか。命がかかっています。即時廃炉、それしかないでしょう」と会場をわかせた。

この日の発言者で最年少タレントの藤波心さんは、「食べて応援しようというのは、人の命を無視した無責任なキャンペーン」。「54基の原発は、この国の繁栄の象徴ではなく、ただの時限爆弾」と言い、「何も知らされない私たちが原発を支えていた。いつ爆発するかわからない原発と一緒に暮らすのはイヤだ」。「子どもたちの未来を、日本の未来を守って下さい」と訴え、参加者と共に「ふるさと」を合唱。澄んだ歌声が胸を熱くした。

作家で宇都宮市出身の落合恵子さんは、「心から原発にノーと言って、命と人権が大切にされる社会を作っていこう。少数であることを恐れない。私たちは誇りある少数派だ」。「反・脱原発に向かって、前を向いて、胸を張って、ネバギブアップ。歩いて行きましょう」と参加者に呼び掛けた。

デモ行進は、明治公園までのAコース。新宿中央公園までのBコースに分かれ、原発止めよう。命が大事。子どもたちを守ろう。原発に頼らない社会を作ろう。さようなら原発などと訴えた。

栃木からは、原発いらぬ栃木の会などから140名がこの日の集会に参加。12000人の仲間と共に、脱原発・さようなら原発などと、都会のど真ん中で訴えてきた。



2.11 集会に参加して

服部有

今年で30歳になる予定の僕がまだ経験していないことの1つがデモ。デモ未体験を遂に克服しました。

さて、原子力発電所は嫌いで、原発事故の後、大木弁護士誘いもあり、4月か5月ころの講演会に参加し、それ以来、何となく居心地がよい・自分の思想とも合うということで原発いらぬ栃木の会の準備会に参加し、そして居心地がいいから準備会に参加し続けたことにより原発いらぬ栃木の会の会計を任されている僕が、今度は、東京までバスで行ける、さらには代々木公園から新宿までの道路を歩けるとの話を聞いて2.11の集会に参加してきました。僕が思うに、歩道を除いて、東京の道路を歩けるチャンスというのは、デモに参加するか東京マラソンに参加するか2回のチャンスしかなく、東京マラソンに参加することなど到底不可能である僕は、前者を選択するしかありません。つまり、東京の道路を歩く機会を逃すわけにもいかないとの思いも重なり今回の集会に参加しました。

せつかく歩くのだから運動する準備が必要。そこで、当日までに、「代々木公園から新宿までの道路を歩く、要するに運動するのだから体に負荷をかけよう。」と思っ、下半身の筋肉に負荷のかかるスパッツを買って、それを履いて参加しました。

代々木公園について、「集会ってこういうんだ。」「TVでよく見る集会の風景に近い。」「いろんなのぼりがあるなあ。」「人がたくさんいるなあ。」つ



て思いながら参加してきました(←ちなみに僕は集会の感想の原稿を頼まれたのですが、集会の感想について述べたのは後にも先にもこの1文のみです。ごめんなさい)。言い訳ですが、初めてのことで何がなんだか分からないし、目の付け所も分からないし、他に体験したことと比べようもないから、こういった抽象的な感想になってしまうと思うんですね。

あと1つ、自分が入会しているからかもしれませんが、原発いらぬ栃木の会の横断幕がかっこよく見えました。かっこいい横断幕を持つ会の会員であることも誇らしく感じました。横断幕は、大きいし、色もきれいだし、他の団体で原発いらぬ栃木の会のような横断幕を持っている団体もなかったし。というわけで、何となく居心地がよいという理由から参加し役員にもなっている原発いらぬ栃木の会のことが更に好きになったような気がします。

目標まであと 385 万

さようなら原発 1000 万人署名

4月6日現在署名数

6,154,043

昨年から取り組んでいるさようなら原発1000万人署名は4月6日で、6,154,043名になりました。

民主党のエネルギープロジェクトチームは、経団連など経済3団体の強い要請に基づいて「原発の稼働なしには今夏電力不足の可能性があると見て」定期点検で停止中の原発の再稼働を容認することとしました。その結果、野田政権は大飯原発の再稼働に向けて、国民世論を押し切っても運転再開をするつもりで動いています。

再稼働は地元合意を前提としているものの、福島原発事故の検証、脱原発の方向を明確にしないまま、再稼働に走ることは、人の命を金で売ることと同様の野蛮で愚かなものです。

私たち、原発いらぬ栃木の会は、多くの市民と連帯し、脱原発で「命により添う社会」、平和で再生可能な社会をめざして、「さようなら原発1000万人署名」を全力でやりきって、7月16日の代々木公園での「さようなら原発全国集会」で脱原発実現の道を開こうではありませんか。

会員全員が5月末まで最大限の力を出して署名を集めましょう。

原発いらぬ栃木の会と栃木県平和運動センターで集めた署名数は、4月11日現在30,147筆です。

福田宏至

3.11 福島県民大集会報告

島田晴夫

とにかく寒い一日でした。宇都宮を出て会場の郡山まではほぼバスの中だったので気になりませんでした。会場から1.5キロもあるバスの乗降所に降り立ったとたん強い風。それでも会場までは歩きですので体を動かしている分寒さもしのげます。歩道のデモのような様子で、手持ち看板などをかかげ、のぼり旗をはためかせて各地からの参加者が一路会場を目指します。

会場に着くと、かつて血で血を洗う内ゲバを繰り返していた一方の党派がまるで市民運動のような格好で機関誌の号外を配っていたり、かと思えばもう一方の党派はかなりくたびれた年代の党員とおぼしき人たちが機関誌を売り込もうと懸命に声をかしていたり、なんだかタイムスリップした様な感覚にとらわれ、いろんな人がきているんだなあと思いました。

集会の会場は開成山球場という野球場。我々がついたときには一塁側とバックスタンドはほぼ満員。押すな押すなのごった返しの中をやっと三塁側のスタンドへ。ここからが寒かったのです。遮る物の無い、寒風吹き荒むスタンドにじっと座っているだけ。一緒のバスだったこの手の集会は初めてという女性が使い切りの懐炉がありますよと声をかけてくれたけど、気持ちだけいただいてやせ我慢。もらっときやよかったな。

そうこうしているうちにオープニングのコーラスが流れ、集会が始まりました。まずは実行委員会の代表が「3、11 この日だからこそ苦しい状況を共有し、今後について思いと決意を新たにすべきとこの集会を企画した。この集会が、福島と日本の新しい変革の日となることを願って開会を宣言する」と力強く挨拶。呼びかけ人代表の福島大学副学長の清水さんは「原発いらない！は福島県民の痛恨の思いを込めた叫び。この言葉を全国の心ある人々に届けるのが福島県民の使命と義務である」と切々と訴えました。

連帯の挨拶はノーベル健ちゃん（毒蝮三太夫談）こと作家の大江健三郎氏。

「私はある夢をしています。それは近い将来のある日、ある朝、すべての学校で、原発を全廃する事が決まると報告する事が出来、子供達の歓声が響き渡るというものです。夢が夢に終わる事無く、この日を目指しましょう」

その後、加藤登紀子さんのコンサート。百万本のバラを聞きながら、お登紀さんも年かな、あのファルセット気味のビブラートがうまく出ていないなんて不遜な事を考えていました。その頃にはスタンドに入りきれない人たちが外野の芝生席に。会場のマイクは「スタンドは除染が済んでいます、芝生席はまだ済んでいません。お子さん連れの方はご遠慮下さい」と叫んでいました。ここは現地なんだと、あらためて現実には引き戻されました。

集会は福島県民の訴えというプログラムに入り、6人の方々が登壇してそれぞれの立場から怒りや悲しみ現状などを訴えました。

山形県に子供を避難させている菅野智子さんは「子供を守りたいと山形に行ったが、それでも福島が好きな事には変わりはない。

二本松で有機農業を営む菅野正寿さんは「第一次産業を守る事が原発の無い持続可能な社会を作る事」。相馬市で漁業を営んでいた佐藤美恵さんは「元通りになるにはまだまだ時間がかかるが、あの美味しかった福島魚を全国の皆さんに届けたい」。飯館村で農業を営んでいた菅野哲さんは「今回の事故ですべてを失った。いったい誰の責任なのだ。事故を風化させてはならない」。わざわざ富岡町の高校に転校し、大好きなサッカーに打ち込んでいた鈴木美穂さんは「人の命も守れないのに電力とか経済とか言っている場合じゃない」。

そして最後に名前を失念してしまったが、中国からの引揚者と名乗った美しい白髪のショートカットでお年にも関わらず凛とした張りのある声で訴えた老婦人は「浪江は原発の無い町。引き上げ以来浪江に住んできた。原発事故後、9ヶ所の避難所を転々とした。避難所は100人いれば100人の苦しみ悲しみを抱えていた。浪江では多くの方が津波で亡くなったが、放射能の影響で未だに遺体の捜索も出来ない状況だ。

避難指示は国からも東電からも無かった。町長は指示をテレビで知ったと言っていた。ほとんどの町民は2～3日で帰れるだろうと着の身着のまま避難した。避難は悲劇的だった。後で知った事だが福島へ続く114号線は、放射線量の最も多いところばかりを通過していたのだ。戦争終結後、中国大陸を徒歩で逃げたが原発事故で避難する車の列は、徒歩が車に変わっただけで、中国での逃避行を思い起こさせた。私たちは国策により二度も棄民にさせられた。いつの時代も国策により苦しみ悲しむのは弱い民衆なのだ。

福島の人、東北の人はもっと声を出すべきだという意見があるが、すべてに打ちひしがれ展望が見えない中での希望の追求は困難だ。しかし、未来の子供達のために脱原発を目標に生きていく事が唯一の希望なのかもしれない。地震は止められないかもしれないが、原発は人の手で止められるはず。私たちはあのふる里で生きていたかった。ささやかでいい、確かな一歩を踏み出しましょう」と締めくくった。最後に「共に怒りを込めて原発いらないの声を挙げ続けましょう」と集会宣言が読み上げられ、圧倒的な拍手で採択された。

寒かったけど参加して良かった。市井で黙々と生きる人々の怒りや悲しみそしてわずかな希望を糧に生き抜こうとする人たちの話が聞けただけでも。

平均の空間線量が1.3マイクロシーベルトなどという犯罪的な空間に生きる事を余儀なくされている人々の現実が垣間見えただけでも。

栃木へ帰ってきてずっと考え続けている。この人たちにどう寄り添えるのか？脱原発、エネルギー政策の転換をどう栃木の地から訴えていったらいいのか？それは、このつたない文章を読んでいるあなたにも突きつけられている課題ではないのか。



3.11 原発いらない福島県民大集会参加時の計測活動

明良佐藤



放射線の空間線量は県北を除き、県央、県東、県南は0.08 ~0.09 マイクロシーベルト /h が現在平均です。これは皆さんの認識になっています。県体育館では、バスの中は低いものでした。バスが高速走行中、自己紹介をしている順番で、ホリバの機器で測っていることを紹介中、計測値がどんどん上がっているのを報告すると、皆、どよめきがあがりました。それが平均値0.26 マイクロです。バスは外から空気を入れているので、その影響もあるのでしょうか、という声もありました。

那須サービスエリアの駐車場は意外と低いで、そのまま次のインターに向けて走行してしまうと、低いという認識が出来てしまいますが、案の定、同じ場所でも、芝生の中は高いのです。しかし、この高さ認識は、郡山につくとさらに高くなります。芝生の中や落ち葉の上は何か所か測っても、いずれも2 マイクロを超えるのです。通常は低いとされる幹線道路の上でも、1 マイクロ常時超えています。児童公園の看板、除染後、1.2 マイクロを記してありました。これが郡山の日常なのでしょう。

ご存知のように、0.23 マイクロシーベルト /h が年間1 ミリシーベルトです。高いといわれているICRPの公衆被曝限度基準です。

私は思い出すのです。アメリカが水素爆発後、すぐに

50 マイル・80 キロ内の人の避難勧告を直ちにしたのを。その生々しい原子力規制委員会の報告が最近公表されて、あらためて認識しています。なぜ日本は3 キロ、10 キロ、20 キロ、30 キロと迷走してこのままなのだ、と。福島市、郡山市は80 キロ圏内です。直ちに避難勧告が出ていい地域で

す。そして、一年経った日常の空間線量は、居てはいけない数値をあらためて示しています。

避難勧告を出し、その保障をし、そのために増税を国民にお願いする。経済危機を回避するためではなく、いのちの危機を回避するための増税。それには政治家としての倫理的覚悟をもって、国民に直接訴えることをしなければなりません。そうすれば納得する。そんな夢をします。夢というものは、日本の政治家の誰ひとりそのような人はいないからです。

そのような政治家が選ばれてくるのは、まだ、早くて三十年先でしょう。

希望はあります。集会では福島県民の声と願いが発せられました。福島の犠牲を通して、日本だけでなく、全世界に向かって、原発をなくす。二度とフクシマをくり返してはいけない、それを訴えていく。ここを出発点とする。参加者1万6千人が呼応しました。東北人は我慢強い、と言われていました。あのような大惨事の中、略奪が起らないことに世界は讃嘆しました。そして、我慢強いだけでなく、声を上げ出したのです。

犠牲の只中から、痛切な思いを持って、脱原発の声の核心になった、感じたのです。私たちは、寄り添い、ともに声を上げていきたいと思っています。

計測場所	線量 (μシーベルト / h)
栃木県体育館 バス中	0.046
那須高速・バス中	0.263
那須サービスエリア	
駐車場中央	0.103
芝生の中のテーブル上	0.743
芝生の中・ケヤキ下 1m	0.699
” 0cm	1.114
郡山南IC バス中	0.419
郡山市バス下車	
直近小学校前土手	1.189
公園通路	1.234
球場前ケヤキ下	1.273
会場・開成山球場	
球場内野席ベンチ(除染済み)	0.363
球場外野席芝生レフト(以下未除染)	
1 m	1.852
0cm	2.391
” センター(計測大木) 0cm	3.19
球場まわり芝生出口付近 0cm	2.686
デモ行進 球場出口付近 0cm	1.588
” 枯れ葉の上 0cm	2,130
デモ行進中・内環状線 道路 1m	1.2~ 1.4
途中の児童公園看板 除染前	2.44
除染後	1.22
帰りバス 乗車前の公園砂場	0.922
帰りバス中・小学校前	0.433



街頭署名活動『国の除染費用負担を求める要望署名』

報告 平尾 洋子

4月8日(日)青空の下、宇都宮東武デパート前、オリオン通り入り口付近にて約3時間の街頭署名活動を行いました。今回は会員の主婦の方からの発案で急ぎよ決まった署名活動でしたが、10人以上の方の協力のおかげでたくさんの方の署名を集めることが出来ました。

県北方面では、年間1ミリシーベルトを超え、子育てや農林畜産、観光、商工等に大きな不安を抱えての生活を余儀なくされているところがたくさんあります。

政府は昨年秋に「年間1ミリシーベルト以上の放射線の除染には国が責任を持つ」と明言したにもかかわらず、今年1月末になって「年間5ミリシーベルト以下の放射線量の地域の除染については一切お金を出さない」と前言をひるがえしました。

那須希望の砦は、政府の理不尽な通告の撤回を要求する署名活動を行うことを決め、2万筆を目標に呼びかけ人を集め、この「原発いらない栃木の会」も協力団体になりました。

この日、「国の除染費用負担を求める署名」は225筆、少し持ち合わせていた1000万人署名は90筆(用紙なくなってしまうと残念-)集まりました。

素人中心の署名活動にしてはまずまずの成果があったと思います。中でも、「肝っ玉母さん」は道行く人々に涙な

がらに今の福島や県北の現状を訴え、たくさんの方の署名を集めました。

例えば10代の若い世代の子供たちには『本当にこんな世の中にしてしまつてごめんなさい。私たち大人が原発をたくさんつくり、その事故のためにあなたたち若い世代が放射能で汚染された環境で生きていかなければならなくなつてしまったの。これは私たち大人の責任で、本当に申し訳なく思っているの。』と語りかけると皆、足を止めその後の話に耳を傾け、署名をしてくださいました。

また、バイクに乗っていた若いお兄ちゃんはバイク越しに署名をしてくださり、「僕も何回かボランティアで宮城に行ってきたけどあつちはホント悲惨でした。このような活動大切ですよ、頑張ってください!」と逆に励まされて元気をいただきました。

原発がこれからも動かないように、そして安心して住める環境を整えていくために、力を合わせて考え行動していきたいと思いました。今度署名活動をするときには、私ももう少し勇気をだして声をかけてみようと思います。

皆さんも一緒に!



脱原発イベント情報

★ 4月30日(月・祝日)

脱原発市民集会 講演会

1:00~受付 1:30~開始 入場無料

「原発訴訟から見た原発の問題点」

講師:海渡雄一氏

「原発事故と現在の市民の避難状況について」

講師:石田仁氏

場所:宇都宮市文化会館第一会議室

主催:栃木県弁護士会 028-622-2008

★ 5月19日(土)

☆ 災害廃棄物広域処理勉強会 13:30~15:30

講師:池田こみち氏(環境総合研究所 副所長)

場所:宇都宮大学工学部アカデミホール

主催:ゴミ問題栃木県連絡会・原発いらない栃木の会

☆ 脱原発デモ宇都宮 14:00 集合 14:30 分デモスタート

集合:まちかど広場(東武宇都宮駅より徒歩5分)

主催:脱原発ネットワーク栃木

☆ 脱原発集会パレード佐野 JR佐野駅前噴水広場

13:30~ 連絡先:関塚 学 TEL/090-2497-3135

- ◎ 県内自治体に対する脱原発の請願・陳情などの働きかけ
- ◎ 県の再生エネルギー推進等の協議会への市民参加の申入れ
- ◎ 脱原発1000万人署名活動はまだまだ継続中です。
- ◎ 講演会学習会等の開催

原発いらない栃木の会 news vol 3

事務局 〒320-0821 栃木県宇都宮市一条4丁目5番11号
大木一俊法律事務所 TEL028-636-0596/fax028-637-4886

☆ 新規会員を募集しています。